

# 魅惑のセノグラフィー — ラシーヌにおける光の劇作法 —

眞 下 弘 子

「眩惑」(éblouissement)は古典主義の視覚的アイデンティティを定義するものである<sup>1</sup>—シルヴェンヌ・ギオは、近代的な「視覚の失墜<sup>1</sup>」が現れる以前、ルネサンスの「彷徨する視線」と啓蒙期の「明晰な視線」の間に位置する古典主義時代の視線のありようを「眩しさ」によって特徴づけている<sup>2</sup>。ギオの指摘する通り、太陽王神話に基づく政治的文脈の中では、「眩しい」ほど光輝く英雄の形象—コルネイユ劇の主人公はその典型である—が、17世紀における視覚表象の、とりわけ悲劇の作劇法の支配的な参照項の一つであることは間違いない。「偉大な世紀」の英雄的世界像を「解体」したとされるラシーヌ悲劇でさえも、この「眩惑のセノグラフィー」(scénographie éblouissante)<sup>3</sup>の助けを借りて、舞台上で繰り広げられる視線のドラマを効果的に演出することを忘れはしなかった：

De cette nuit, Phénice, as-tu vu la splendeur?

Tes yeux ne sont-ils pas tous pleins de sa grandeur?

(*Bérénice*, I, 5, v.301-302)

---

<sup>1</sup> M. Jay, *Downcast eyes: the denigration of vision in twentieth-century French thought*, University of California Press, 1993. 『うつむく眼——二〇世紀フランス思想における視覚の失墜』、亀井大輔・神田大輔・青柳雅文・佐藤勇一・小林琢自・田邊正俊訳、法政大学出版局、2017年。

<sup>2</sup> S. Guyot, « *Entre éblouissement et Véritables Grâces. Racine ou les tensions de l'œil classique* », in *Littératures classiques*, Armand Colin, 2013, No82, p.127-142.

<sup>3</sup> *Ibid.*, p.137.

フェニスよ、  
 ゆうべの華やかな儀式を見なかったの？ お前の目はあの方の輝きに、  
 眩んでいよう<sup>4</sup>。

ギオはラシーヌの『アレクサンドル大王』と『エステル』の二作品を読解しながら、そこに、コルネイユの舞台で交わされていたものとは異なる、「目眩まし」(aveuglement ébloui) を拒絶する視線や、光と闇の二項対立を回避する視線を発見し、これら複数の視線が交差することで形づくられる別種の「視線のエコノミー」を見出していく。そして、「眩惑」という17世紀的視覚のモデルを批判するようなラシーヌの舞台演出法は、ベニシュ以来通説となっている古典主義的英雄像の「解体<sup>5</sup>」や人間の諸価値の転換を表明するというよりも、むしろ「目眩まし以外の、正当な(légitime)または正当化する(légitimant) 視線の可能性」を主張していると分析するのである<sup>6</sup>。ここで語られる視線の「正当性」は、ギオによれば見る側の「同意」(assentiment)の問題であり、見る側が見ずして対象に同意を与えることをやめて、対象を見て受諾の可否を判断する「正当な」権利をもつ、ということである。観客も含めた「見る者」は、見るべく与えられた対象を盲目的に受け入れてその権威を全面的に肯定する「共犯」や強いられた「証人」ではなく、その受容について賛同することも拒否することもできる、歴史的で個別の「活きた眼」(l'œil vivant)<sup>7</sup>となる、ということなのである。上記に引用した『ベレニス』でも、パレスティナ女王ベレニスは愛するローマ皇帝ティテユスの即位の儀式を、先帝ヴェスパシアヌスの華麗な儀式の夜景と重ね合わせてうっとりと思い描くが、

<sup>4</sup> ジャン・ラシーヌ、『ベレニス』、戸張智雄・戸張規子訳、世界古典文学全集第48巻、筑摩書房、1965年。本文中の原語によるラシーヌ作品からの引用はすべて、J. Racine, *Œuvres*, éd. P. Mesnard, Paris, Hachette, coll. « Les Grands Écrivains de la France », 1885-1888, t.II-VIによる。

<sup>5</sup> P. Bénichou, *Morales du grand siècle*, Gallimard, 1948, p.155-180.

<sup>6</sup> S. Guyot, *op. cit.*, p.129-130.

<sup>7</sup> *Ibid.*, p.128. ここでギオはスタロバンスキーの「活きた眼」の概念を批判的に取り返しながら「生きている vivant」眼の能動性に光を当てている。

彼女を眩惑する「光輝」はやがてローマの厳しい視線や皇帝自身の逡巡する視線によって分散されてその輝きを失い、彼女を失寵へと追いやる悲劇の核心をなしていることに注目すべきであろう。

この視線の「正当性」について、ギオの論を今少し追いながらラシーヌの劇作法へと考察を進めていってみたい。

## I. 恩寵の世俗化

ギオは『アレクサンドル大王』という劇作品を「眩惑する視線の危機」と捉え、この偉大な王に対して難敵ポリュスや恋人クレオフィルなどの「活きた眼」が注ぐ視線の分だけ、その「完璧な王の模範」という肖像が様々な表情に碎片化されていくことを示す。さらにギオは『エステル』におけるユダヤ王妃エステルとペルシャ王アシュエリユスの「対面」＝視線の「対決」(face à face) に注目して、最後の合唱隊の歌声の中に「恩寵の世俗化」(sécularisation de la grâce) を見出し、これが「新たな視線のモデル」の展開へとつながるものであると主張する。ルーベンス派のアントワヌ・コワペルの絵画『アハシュエロス (アシュエリユス) の前のエステル』のように、そこでは恩寵 (Grâce) の働きが繊細に官能的に、エステルの優美さ (grâce) による誘惑の効果として描かれているのである。気絶するエステル妃を見て立ち上がり彼女に近づき、片方の手で妃の白い腕を支え、もう一方の手で侍女にもたれかかる彼女の震える肩を抱くペルシャ王。エステルの美しさに誘惑され回心するアシュエリユスの身体は、もはや自身が発する眩しい光の「光学的」効果のなかで至高性へと昇華されることはない。その肉体から生じる「感覚的」効果を自身が「与り知る」(participer) ことによって、その英雄的価値をエステルや観客によって承認してもらっているのである。

この「恩寵の世俗化」という動きは、ギオによれば、17世紀の宮廷作法である「ギャラントリー (典雅)」の美学と、絵画や彫刻における官能美に対するバロック的な嗜好性に影響を受けて現れたもので<sup>8</sup>、『エステル』最終場の少女た

---

<sup>8</sup> *Ibid.*, p.138.

ちの歌声の中に込められた一抹の逡巡と共鳴しているのだという。エピローグの合唱はプロローグでの「聖書の偉大な真理」を賛美する「優雅、謙譲、敬虔」と確かに響き合っているのだが、最後に発せられる、内在性と超越性の間で揺れるかすかなためらいの声を聞き逃してはならない、というのである。自然の驚異を人の徳の高さとして、神の奇跡を世俗の美としてエステルの栄光をたたえるその聖・俗未決定の曖昧な歌唱法が、これまでにはなかった新たな視線の作劇法を明示するのだとギオは主張している。

Esther a triomphé des filles des Persans.  
 La nature et le ciel à l'envi l'ont ornée.  
 Tout ressent de ses yeux les charmes innocents.  
 Jamais tant de beauté fut-elle couronnée?  
 Les charmes de son cœur sont encor plus puissants.  
 Jamais tant de vertu fut-elle couronnée?      (*Esther*, IV, 9, v.1298-1303)

エステルはペルシア人の娘たちに勝ちました。  
 自然と天が、競って彼女を飾ったのです。  
 その眼のすべてが無垢の魅惑を強く感じさせます。  
 これほどの美人が妃になったことがありますでしょうか。  
 心の魅惑はなお強いのです。  
 これほどの徳高い人が妃になったことがありますでしょうか<sup>9</sup>。

すでに第2幕7場において、眩しさという眼差しの脅威によって支配するアシュエリユスが発見したエステルの「魅惑」(grâce) は、他動性と「心地よさ」の徴の下に、この舞台に別様の視覚空間を開き始めていたことを思い起こそう：

<sup>9</sup> ジャン・ラシーヌ、『エステル』、福井芳男訳、世界古典文学全集第48巻、筑摩書房、1965年。

Je ne trouve qu'en vous je ne sais quelle grâce,  
Qui me charme toujours, et jamais ne me lasse.  
De l'aimable vertu doux et puissants attrails !  
Tout respire en Esther l'innocence, et la paix.  
[...]

Que dis-je ? Sur ce trône assis auprès de vous,  
Des astres ennemis j'en crains moins le courroux.  
Et crois que votre front prête à mon diadème  
Un éclat, qui le rend respectable aux dieux même.

(*Esther*, II, 7, v.739-748)

そなたの中にのみ何か知らぬ優しが見え、  
常にわしを魅惑して倦ますことがない。  
愛すべき徳の甘美にして強い魅力！  
エステルの中にはすべてが無垢と平和を息づいている。  
[・・・]

いやそれどころか、そなたのそばで玉座に坐れば、  
不運の星の怒りを恐れることは少なく、  
そなたの顔がわが王冠に輝きをかして、  
神々にまで敬わるるようである<sup>10</sup>。

エステルの「魅力」はアシュエリユスと同様に「力」を持つが、「優しさ」を備えているがゆえに他者の視線を脅かしたり遠ざけたりはしない。それどころか、この若き王妃の「そばに坐りたい」という欲望を見る者に抱かせ、彼女の「輝き」をアシュエリユスに移染させて、本来は王のみが所有する譲渡不可能な「稜威」を彼に貸し与えてもくれるのである。色彩と光に溢れたコワバルの絵画のように、視覚空間は磁場となって、エステルから発するこの強力な磁気がま

<sup>10</sup> *Ibid.*

ず見る者の視線を引きつけ、次にその身体を丸ごと、この時空へ引っ張り込んでしまうのである。それは一瞬のうちに視線を捕らえ、掴み、魅了して虜にしてしまう、ほとんどエロティックな奇跡のヴィジョンなのだ。

さらに私たちはここで、この「恩寵の世俗化」について、『救済の盲目』の著者ロラン・ティルアンによる指摘と、フィリップ・セリエによる「有効な恩寵」の解説を手掛かりに、別の角度からその意味を吟味してみる必要がある。

「ラシーヌ演劇はその内部にポール・ロワヤルとアウグスティヌスの神学および人類学を宿している」と断言するティルアンは、『エステル』をアウグスティヌス主義のテキストとして読解することに躊躇を示さない<sup>11</sup>。彼はアシュエリユスの回心の場面—「一瞬に、あの酷いお心が変わったのよ。吠える獅子が穏和な小羊になりました<sup>12</sup>。Un moment a changé ce courage inflexible. Le lion rugissant est un agneau paisible. (II,8 v.793-4)」—を取り上げて、この突然のアシュエリユスの変容に注目し、それがエステル的美しさによる「魅惑」によって引き起こされたという事実を強調して、ここにこそ最大限に発揮された「恩寵」の効力があると指摘している。この見解はフィリップ・セリエが「有効な恩寵」の特徴を説明する際に必ず言及する「エロティシズム」を踏まえたものである。

La grâce est irrésistible. Elle est toute-puissante. Elle s'insinue dans l'âme humaine. Saint Augustin est très gêné, parce que « que devient la liberté »? Il a cru pouvoir y répondre avec une métaphore érotique, amoureuse : elle s'insinue dans l'âme humaine comme un charme magique. Elle l'enivre. C'est une ivresse. L'homme, enivré par la grâce, se précipite vers le bien, vers l'éternel.

<sup>11</sup> Bienvenue à Port-Royal (4/4), *Le théâtre et sa condamnation*, Les chemins de la philosophie, France Culture, le 05/12/2013, <https://www.franceculture.fr/emissions/les-nouveaux-chemins-de-la-connaissance/bienvenue-port-royal-44-le-theatre-et-sa> (10/08/2021)

<sup>12</sup> ジャン・ラシーヌ、『エステル』、福井芳男訳、世界古典文学全集第48巻、筑摩書房、1965年。

恩寵は（あらわれるときには）抗し難いものである。全能である。それは人間の魂の中に忍び込んでくる。「では自由はどうなるのか？」という問いに対して聖アウグスティヌスは困惑したが、エロティックな、恋愛の隠喩で答えることができると思った。恩寵は魔法の魅惑のように人間の魂のうちに入り込む。それは魂を酔わせる、陶醉である。恩寵に酔いしれて、人間は善へと、永遠へと向かって急ぐ<sup>13</sup>。

ラシーヌはベルシャ王の回心の場面を描きながら、繊細なやり方で様々な視線—エステル誘惑の視線やアシュエリユスの欲望の視線、また宮廷人や観客たちの好奇の目など—を引き寄せ、それらの視線を聖史劇『エステル』というテキストの内的な信仰という宗教的息吹のうちに包み込み、「見る」こと感覚的な喜びや楽しさをキリスト教的熱誠のなかに、小文字の *grâce* と大文字の *Grâce* との一体化のうちに溶解させようとする。こうして、ギオの指摘した「恩寵の世俗化」は、「官能性」を光軸としてティルアンやセリエによるアウグスティヌス的解釈と交わり、画家コワベルが精緻なエロティシズムとともに魅惑の効果として視覚的に翻訳した「恩寵の働き」(*l'action de la Grâce*)へと私たちを再び送り返すのである。『エステル』において「眩惑」から「魅惑」へと移行した新たな視線のセノグラフィーは、観客の眼差しと女性の身体との間の、見る（欲望する）身体と見られる（誘惑する）身体との間の、触れ合うほどの「近さ」をその掛け金としている。17世紀末になって、伝統的な「古典主義」演劇の観客たちの目はもはや受動的でも服従的でもなく、素直に感動したり言うことを聞かずに反発したりと、多様に変化する視線の布置を描き出すようになった。舞台演出においては目を眩ませることよりも目を引き、身体ごと目を奪うことがより重要となる。*Grâce* と *grâce* の間に仄見える輝き (*éclat*) を頼

---

<sup>13</sup> *Bienvenue à Port-Royal (1/4), Des moralistes à la Morale*, Les chemins de la philosophie, France Culture, le 02/12/2013, <https://www.franceculture.fr/emissions/les-nouveaux-chemins-de-la-connaissance/bienvenue-port-royal-14-des-moralistes-la-morale>

(10/08/2021) (訳は引用者による)

りに、私たちは、様々に屈折する光束によって織りなされるこの視線と身体の複層的関係をラシーヌ演劇のうちに見ていこうと思う。

## II. 「恩寵を欠いた義人」

Je le vis, je rougis, je pâlis à sa vue ; (Phèdre, I, 3, v.273)

その人を見た、見て顔赤らめ、私は色を失った<sup>14</sup>。

義理の息子イポリットへ禁断の恋心を抱き、錯乱状態にあるフェードルの身体的徴候が、この3分割の音節のリズムを伴って現出する。この123、123...というリズムは、激しく打つ彼女の心臓の鼓動と呼応し、「vis, rougis, pâlis」という動詞がすべて半諧音[i]と結びついて、このアテネの女王の呻き声と重なり合っていく。さらに続く詩行276の「Je sentis tout mon corps et transir et brûler」: (「五体のことごとく、凍てつくかと思えば、また火と燃え上がった」という表現にある、transir「凍えさせる」/ brûler「燃える」という極寒/極熱の対比が等位接続詞「et」の反復によって強調されて、彼女の心的不安や身体的動揺を増幅していくのである。この不安と動揺は何よりも視覚によってもたらされたものであり、フェードルがヴェニユス女神の罠に陥るのは彼女の「目」によってである、という事実も見逃してはならない。

Athènes me montra mon superbe ennemi :

Mes yeux ne voyaient plus, je ne pouvais parler ; (Phèdre, I, 3, v.272,275)

あれはアテネ、凛々しい敵のお姿を見せてくれたのは。

目は見れどももはや見えず、口は渴いて声も出ぬ<sup>15</sup>。

<sup>14</sup> ジャン・ラシーヌ、『フェードル アンドロマック』、渡辺守章訳、岩波文庫、岩波書店、1993年。

<sup>15</sup> *Ibid.*



自らの意思で行動できないのなら、視覚を失ったのも同じ — 知らずして父を殺し、母を妻とし、真実を目の当たりにして自らの両目をえぐり取った、まさにギリシャ悲劇の近親姦姦の象徴であるオイディプス王を喚起する台詞である。フェードルが知ることになる真実—「これこそは、ヴェニウス大神、恐るべき呪いの炎、女神の呪い給う血筋には、免れ難い恋の責め苦！」—を語る2つの詩行では、「恐るべき」を意味する形容詞 « redoutable » と「免れ難い」を意味する形容詞 « inévitable » が脚韻を踏むことによって、個人の恋の劇を超えた運命の奥行きをもつ『フェードル』の悲劇的世界観が強調されることになる。

この「悲劇的世界観」に関しては、L. ゴールドマンの大著『隠れたる神』の分析によって、法服貴族という社会的階層であるジャンセニスト集団の「悲劇的ヴィジョン」こそがパスカルの『パンセ』やラシーヌの悲劇の世界を形作るイデオロギーであるという解釈が大きな反響を呼び<sup>16</sup>、その結果ラシーヌはジャンセニスト作家であるという見解が一般的となった。根源的に悪であるこの世を捨てて神に帰依する回心を演劇化したものがラシーヌの悲劇である、という解釈を軸に、人間の救いはひたすら神の無償の恩恵によるのであり、一切が神の選択次第であるとするアウグスティヌスの教説の唱道者であるジャンセニスト、その思潮的党派の一員であるべきラシーヌの作品を特徴づけるのは « fatalité » 「宿命」である、とあまりにしばしば説明されてきたのである。それ以前においても、ポール・ロワヤルのアルノーは、『フェードル』に人間生来の惨めさの象徴を見出してその教化的側面を評価したし、ヴォルテールもまたこの悲劇のヒロインを「恩寵を欠いた義人」(« une juste à qui la grâce est manquée ») と定義して、ジャンセニズム的教条をここに読み込んだのであった。

フェードルを「恩寵をかいた義人」として聖ペトロのイメージに重ね合わせ、ジャンセニストのヒロインとして祀り上げ、「宿命」こそがラシーヌ演劇の中に刻み込まれたジャンセニズム—思想的現象としての—、あるいはポール・ロワ

<sup>16</sup> Lucien Goldmann, *Le Dieu caché, Étude sur la vision tragique dans «les Pensées» de Pascal et dans le théâtre de Racine*, Gallimard, 1955.

ヤル修道院—その実践の場としての—のしるしであるとするこの考え方に、またしてもティルアンは異議を唱える。アウグスティヌスの説く「有効な恩寵」の教義の、原罪とそれに続く墮落とを基礎とした、あまりに暗く悲観的な表象—原罪によってその自由意志が貶められ、以後自分の力では善を成し得ず、虚偽と罪しか成し得なくなった奴隷状態にある人間—を強調せずに、より楽観的な側面、すなわち、神によって人間に与えられる恩寵は、その効果を誤りなく発揮し、しかも人間の自由を侵害したり破壊したりすることはない、という考え方に力点を置くことを選ぶのである。そして、「実際には、宿命はラシーヌ演劇においてわずかな場所しかもたない。というよりも、宿命がほとんど場所をもたないということが、ラシーヌ演劇にきわめて深いポール・ロワヤルの刻印を与えている」と主張する：

一般に「宿命」について語られるとき、「宿命」は神学的な「有効な恩寵」つまりアウグスティヌスの説く恩寵と同一視される。恩寵が有効であるのは、それが人間に、望むと望まざるとにかかわらず与えられるからである。ところで神学的な見地からすると、「有効な恩寵」はどんな場合であっても決して、人間が拒絶できないような強制的恩寵ではない。それは人間に自由を取り戻させる神の恵みであり、人間に自由を回復させるものである<sup>17</sup>。

ここからティルアンは、『ブリタニキウス』における二つの自由の概念とその相克について例証していく。ネロン帝の壮大な野望の描出を前景に押し出すこのラシーヌ悲劇にあって、ネロンの「善良な」後見役ピュリュスの説く「自由」と、ブリタニキウスの後見役で、創世記の蛇に喩えられるような「邪悪な」ナルシスが考える「自由」とがどのように異なり対立し、各々がネロンという「生まれ出ざる怪物」にどんな効果を醸成するのを見極めなければならない、と

<sup>17</sup> Bienvenue à Port-Royal (4/4), *Le théâtre et sa condamnation*, Les chemins de la philosophie, France Culture, le 05/12/2013, <https://www.franceculture.fr/emissions/les-nouveaux-chemins-de-la-connaissance/bienvenue-port-royal-44-le-theatre-et-sa> (10/08/2021) (訳は引用者による)

いうのである。

「陛下は、陛下御自らの主人、つまるところ母君の主人でもあらせられる筈ではありませんか。」(« N'êtes-vous pas, Seigneur, votre maître et le sien ? ») (V.490) — すべては「主人」(« maître »)としてのネロンの選択次第であると、ナルシスはブリタニキウス暗殺の決断をネロンに迫り、やり遂げれば「自由」が得られるとけしかける：

Faites périr le frère, abandonnez la sœur.

[...]

Vous seriez libre alors, Seigneur, et devant vous

Ces maîtres orgueilleux fléchiraient comme nous.

(*Britannicus*, IV, 4, v.1450,1465-1466)

弟宮は亡き者にし、姉宮はお捨てなさいまし。

[・・・]

そうなれば、陛下は自由になれる筈。そしてあなた様の御前には、あの高慢なお師匠様達も、我ら同然、はいつくばる事でしょうに<sup>18</sup>。

一方でジュリウスはネロンに、楽園の蛇の囁きには決して耳を貸してはならない、そんなことになればネロンは自らの「主人」たることを捨てて「自由」を失うことになるのだ、今ならまだ自身の「主人」でいることができる、と忠告する：

C'est à vous à choisir, vous êtes encor maître.

Vertueux jusqu'ici vous pouvez toujours l'être.

Le chemin est tracé, rien ne vous retient plus.

---

<sup>18</sup> ジャン・ラシーヌ、『ブリタニキウス』、渡辺守章訳、世界古典文学全集第48巻、筑摩書房、1965年。

Vous n'avez qu'à marcher de vertus en vertus.  
 Mais si de vos flatteurs vous suivez la maxime,  
 Il vous faudra, Seigneur, courir de crime en crime, [...]

(*Britannicus*, IV, 3, v.1339-1344)

お選びになるのは陛下、今ならまだ、御心のままになされます。  
 今日まで、御高德の誉れ高くましました以上、今後もそのままでおわせられます。

道はすでに引かれており、何物もそれをはばみ奉る物はなく。  
 美德より美德へと真直ぐに、ただ歩をお進めになればよろしいのです。  
 しかしひと度、佞人輩の甘言に耳をお貸しになりましたら、  
 陛下はもはや罪から罪へと、ひたすらに走って行かれる他に道はなく、  
 [ . . . ]<sup>19</sup>

ティルアンは、この究極の選択において、ネロンに押し掛かるような「宿命」はどこにもないと断言する。ここで問題になるのはひたすら「ネロンは自由になるのか否か？」という一点に尽きる、と強調しながら、

Ses yeux indifférents ont déjà la constance  
 D'un tyran dans le crime endurci dès l'enfance.

(*Britannicus*, V,7 v.1711-1712)

他人事のように無感動なあの眼差し、そこには幼少より罪に落ち、冷酷を極めた  
 暴君の非情さが、すでにありありとうかがえました事でございます<sup>20</sup>。

<sup>19</sup> *Ibid.*

<sup>20</sup> *Ibid.*

このビュリュスによって語られた « déjà » « endurci » という言葉に注目して、たった一幕の間で、時を置かずに、自身の「主人」であったネロンは罪の囚われ人へと変わり、自らの手のうちにあった自由を失ってしまった、という事実を確認するのである。この「生まれ出ざる怪物」の眼差しの中に、すでに、母であるアグリピーヌは息子が自分を後に暗殺すること、セネカ殺しなど悪行の数々を犯すことを予見している。最終幕第6場のアグリピーヌの呪詛は、悲劇的宿命の仕業を告発しながらも、私たちの目に映るがままの人間、その本性の衝動への不信と峻厳さに貫かれたアウグスティヌス的な恩寵に基づく自由のあり方を、私たちに指し示している。絶対に無償で不可抗力である神の恩寵のなかで、人間の自由意志は何の役に立つのか。ポール・ロワヤルの師たちのもとで討議を重ねた「自由」や「善」の問題を、ラシーヌは演劇のなかで再び問い直しているのかもしれない。

ティルアンの『ブリタニキウス』に関する考察を踏まえ、『フェードル』の舞台に戻ろう。第1幕3場でフェードルが乳母を前にイポリットへの恋心を告白する場面である：

Ce n'est plus une ardeur dans mes veines cachée :  
C'est Vénus tout entière à sa proie attachée. (*Phèdre*, I,3, v.305 – 306)

もはや五体の血にひそむ恋の熱情などではない。

ヴェニウス大神ご自身が、銜えて放さないのだ、餌食を！<sup>21</sup>

この二行にはアテネの女王を押しつぶす「宿命」のすべてが含まれていると言える。渡邊守章の的確な解説を引くのであれば、ここでは「情念」というものを、単に一般的に人間のなかに内在する「宿命」として描くだけでなく、その「宿命」を古代悲劇のそれにも匹敵する恐るべき相貌のもとに、しかも単に

<sup>21</sup> ジャン・ラシーヌ、『フェードル アンドロマック』、渡辺守章訳、岩波文庫、岩波書店、1993年。

人物に内在するものではなく人物に対して外在する打ち克ち難い力として君臨させるために、古代の神話的宇宙を再現しようとしている<sup>22</sup>」ということになるが、私たちはこの「宿命」の在処をもう少し詳細に観察する必要がある。

この短い二行のうちに描かれる一瞬の間で、この劇全体の均衡が大きく転換することに注目したい。詩の統辞的構造 « Ce n'est plus / C'est » からも見えてとれる通り、私たちはここにある「それ以前 / それ以後」という断絶をはっきりと捉えることができる。最初の詩行では、フェードルはまだ不可能な愛に苦悩するひとりの人間であり続けている。その「恋の熱情」(« ardeur ») は彼女の血管の内に「隠されて」(« cachée ») いるのだが、それがまさしく今、白日の下に晒されようとしているという、この一点に劇行為の一切が賭けられているのだ。次の詩行ではフェードルは「餌食」(« proie ») となる、すなわち捕食者ヴェニウス女神の獲物になるのである。五体を女神に驚掴みにされ、自由な意志を剝奪されたフェードルはもはや、人間ではなくなる。フェードルが自身で描き出す「餌食＝獲物＝恋の虜」という形象は、一瞬のうちに自由を奪われて囚われ人 (« prisonnier ») となったネロンの姿に重なり合う。狩獵と怪物の二重の主題系に貫かれた『フェードル』の舞台で可視化される「獲物」の肉体の生々しさが、「宿命」という演劇的装置を神話的宇宙から、キリスト教的純粹主義からも引きずり降ろして、再び人間の次元へと引き戻していく。肉体的存在の持つ官能的な魅惑のドラマが展開されていくのを私たちは見るのである。バルトがいみじくも看破したように<sup>23</sup>、『フェードル』は「唯名論的悲劇」であり、ここでも「宿命」に代わって「自由」が問題となる。禁断の恋の相手「イポリット」の名を「言うか言わないか」という選択のうちに、彼女の沈黙のうちに、フェードルの自由がある。

### Ⅲ. 欲望する身体

こうして、演劇の視線とともに不可避的に浮かび上がってくる身体の問題を、

<sup>22</sup> フランス文学講座 第4巻演劇、福井芳男他編、大修館書店、1977年、p.219.

<sup>23</sup> Roland Barthes, *Sur Racine*, Seuil, 1963, p.109-110.

今一度アウグスティヌスの恩寵論に照らして考察するために、冒頭の『エステル』におけるアシュエリユスの回心の場面に立ち戻ってみよう。「常にわしを魅惑して倦ますことがない / 愛すべき徳の甘美にして強い魅力！」(II,7, v.739-740) と感極まって叫ぶペルシャ王の言葉を、ティルアンとセリエは、信仰の内部に深く踏み込んで恩寵の光に満たされた、忘我の恍惚状態の表出そのものであると説明した。これこそがアウグスティヌスの「恩寵」が発現する瞬間であると指し示したのであった。

ここでパスカルの『パンセ』のうち「賭」の名称で知られる有名な断章を思い起こしたい。神の存在の有無について賭を設定するという大胆なパスカルの発想が展開される箇所である<sup>24</sup>。どこまでも理性に従って判断しようとする自由思想家は、「(神ありと) 賭けるようにと強いられているが、ほくは自由の身ではない。身を解き放してもらえない。ほくは信じることができないように作られているのだ」と告白して信仰を拒絶するのだが、護教論者はこの対話者に向かって、あなたがまるで信仰を持っているかのように振る舞い、聖水を受け、ミサを唱えてもらいなさい、と助言する。祈り、跪いて、馬鹿になりなさい(“vous abêtira”)、と勧めるのである。フィリップ・セリエがこの断章を「機械論」と関連づけて解釈しているように、ここでは人間の身体が信仰の形成に重要な役割を果たすことが強調されて、パスカルが「身体の思想家」でもあることに私たちは気づかされる。身体に働きかけることで祈りの行為を習慣づけ、神に抗う心を信仰へと方向転換させることができる、とパスカルは確信しているのである。そして、この助言を受けた自由思想家の反応に注目しよう。「ああ、この話を聞くと、我を忘れて恍惚となる」—この愉悦に満ちた忘我状態もまた、アウグスティヌスの「恩寵」が訪れる瞬間を物語るものであるに違いない。

新プラトン主義の神秘主義的傾向が強く残る聖アウグスティヌスの『告白』では、「回心」という出来事が、善をなしえない無力な人間の現実に基づいて思

<sup>24</sup> Pascal, *Pensées*, texte établi, annoté et présenté par Philippe Sellier, «Classique Garnier», Garnier, 1991, fr.680(L418-B233). 前田陽一、由木康訳『パンセ』、中公文庫、1973年、P.158-161。

索されている。アウグスティヌスによれば、人間は何よりもまず、「欲望する」存在である。『告白』第10巻第30章から36章では、『ヨハネの第一の手紙』を引用しながら、人間の身体に潜む「肉の欲」(concupiscentia carnis)、「目の欲」(concupiscentia oculorum)、「世間的野心」(ambitione saeculi)の三つを、精神が欲することに逆らう「情欲」(libido)の働きとして告発し、人間は欲しながら、欲していることをできない状態にあることを説明する。神と自己を知らない人間は、こうした感覚的欲望を満たそうとして飽くなき欲望に燃えてしまうというのである<sup>25</sup>。

それにしても、この欲望と罪の塊である悲惨な人間、「欲望する存在」としての人間を、否定せずに肯定的に捉えたらどうなるのだろうか、と『告白』のアウグスティヌスは問いかける。この人間の「欲望」が「恩寵」という神の恵みに浴することができたら、人間は回心することができるのではないだろうか？もしも人間が欲望の「囚われ人」であるのなら、その欲望を別の方向に振り向けることで、(誤った)欲望の牢獄から脱出することができるのではないだろうか、と考えてみるのである。「人間は神の恩寵を受け、神の愛を知ることにより、自分の欲していることを欲せず、あなたの欲したもうたことを欲するようになる<sup>26</sup>」—この欲望の軛からの解放のプロセスを、アウグスティヌスは次のように解説する。

Voilà notre vie: nous exercer en désirant. Le saint désir nous exerce d' autant plus que nous avons détaché nos désirs de l'amour du monde. Nous l'avons déjà dit à l'occasion : vide ce qui doit être rempli. Ce qui doit être rempli par le bien, il faut en vider le mal<sup>27</sup>.

<sup>25</sup> アウグスティヌス『告白(上)』、服部英次郎訳、岩波書店、1976年、3.3.1.

<sup>26</sup> *Ibid.*, 9.1.1.

<sup>27</sup> *Sermon de saint Augustin sur la première Lettre de saint Jean*, 8, no4-5. [https://www.abbaye-tamie.com/archives/la\\_communaute/la\\_liturgie/homelies\\_tamie/archives-homelies-tamie/homelies\\_2014/sermons-de-saint-augustin](https://www.abbaye-tamie.com/archives/la_communaute/la_liturgie/homelies_tamie/archives-homelies-tamie/homelies_2014/sermons-de-saint-augustin) (08/10/2021)



これが私たちの生である：欲しながら行う。世の愛への欲から私たちが離れるだけ、聖なる欲が私たちに働きかける。私たちはすでにこう語っていた：満たされるべきものを空にしなさい。善によって満たされるべきものから、悪をかい出さねばならない。

アウグスティヌスはこうした「世の愛への欲」である感覚的欲望を転倒した欲望とみなしながらも、方向を撓めることさえできれば、これを信仰へと向かう積極的な原動力に変化させることができる、と考えるのである。『告白』では同時に、若気の至りによって劇場に通い、悲劇を見ては快楽に浸っていたこと、「醜い疥癬で汚されたこと」に対する自分自身への深い後悔の念が吐露されている<sup>28</sup>。悲劇を見て歓喜する観客の心と身体が、いかにキリスト教信仰の条件から離れたものであるかが説かれるその一方で、観客が「はげしくひきつけられてゆく」演劇の魅力、観客の「欲する」力が際立つように浮かび上がってくる。演劇の本来の効力が、「見る」欲望が引き起こす快楽の危険性のうちに潜んでいるのだとすれば、演劇の上演＝表象に、視線に、身体に働きかけることで、「回心」という心の飛躍を引き起こすことができるのではないか—アウグスティヌスも、パスカルも、そしてラシーヌも、演劇という特異な表象様式だけが持つこの潜在的な力に気づいていたのである。

「見る行為は、その烈しさの故に、夜を生み出す」と、ラシーヌの悲劇的世界を表現したのはスタロバンスキーであった。確かに、フェードルは迷宮降りの幻視によって地獄の闇を作り出し、アンドロマックはその「女の瞳」によってトロイア落城の夜を再現した。エステルを照らす眩いばかりに輝く神の光、太陽神の末裔であるフェードルの情欲が放つ「黒い炎」という撞着する光、皇帝ネロンが自由を捨てて獲得した悪の光輝、こうしたラシーヌ演劇を彩る様々な光は、視線が生み出す夜の闇とどのような関係にあるのだろうか、最後に見てみよう。

<sup>28</sup> アウグスティヌス『告白(上)』、服部英次郎訳、岩波書店、1976年、3.2.4.

#### IV. 光の深淵

Adorons le Père suprême,  
 Principe sans principe, abîme de splendeur,  
 Le Fils, Verbe du Père, engendré dans lui-même,  
 L'Esprit des deux, qu'il lie, amour, don, paix, ardeur<sup>29</sup>

(Le Dimanche de la Trinité)

至高なる御父に賛美をささげよう。  
 根源なき根源、光の深淵、  
 神の御子、御父のうちに生まれた御言、  
 御父と一体なる聖霊、愛、献身、平和、熱誠。 (三位一体主日)

ラシーヌは、キリスト教典礼聖歌として17篇の時課典礼(朝課、賛課、晩課)を書き残しており、それらは、聖アンブロシウスの手になる聖務日課をフランス語に俗語訳するというポール・ロワヤルのプロジェクトの一環として1688年に出版された、ル・トゥルヌー編『ラテン語とフランス語によるローマ聖務日課』に収められている。彼はポール・ロワヤルの「小さな学校」(Petites écoles de Port-Royal)で学んでいた幼少期にすでに、この典礼聖歌の試訳に取り掛かっていたとされるが、そこから実に30年の時を隔てて一演劇を罪惡視するこの修道院からの離反と絶縁を経て和解へと至るまで一、漸く完成した翻訳が恩師サシの作品とともに収録され刊行されたことになるわけであり、この事実は「放蕩息子」ラシーヌの内的、靈的な動きの軌跡を映し出す証左として大変興味深い。

Splendeur — 眩いばかりに烈しく輝く神の光。「小さな学校」の聖務日課で幾度、生徒であるラシーヌはこの言葉を耳にしたことだろう。立派な、敬虔な

<sup>29</sup> *Le Bréviaire Romain en latin et en français. Suivant la reformation du S. Concile de Trente... Divisé en quatre parties.* Traduction de N. Le Tourneux, Paris, Chez Denys Thierry, 1688, ISNI 0000 0000 6137 1703.

「隠士たち」— 彼が敬愛し、尊敬し、そして彼の監督者でもある師たち— に囲まれて幼年時代を過ごしたラシーヌは、人生の初期に聖書を読むことを日常の糧とし、同時に、まさしくポール・ロワヤルの「卓越した教育<sup>30</sup>」のなかで、あのギリシャの神々の煌く臨在への嗜好を育んでいった。ポール・ロワヤルでのキリスト教的ユマニズム教育を通して、キリスト教世界と異教的文化とは、彼の内で互いに対立するものではなく、混じり合うものとなっていったようである。ラシーヌにおいてしばしば語られる、キリスト教教育の影響とギリシャ・ローマの神々への傾倒という二律背反の問題 —この最終的な解決策は『アタリー』にまで持ち越されるとピカルは言う。生涯彼を捉え続けた、相反するものへの平等な傾向、彼の方ではそれを一つの能力として利用し、相反するものを一致させるところまで推し進めたこの二重性への傾向の萌芽的な形が、「小さな学校」での彼の学習体験のうちに見出されることについては、すでに別稿で論じた通りである<sup>31</sup>。別稿と一部重複するが、ここでは、ラシーヌ悲劇の「原夜」を生み出すこととなったポール・ロワヤルにおける光の体験に焦点を当ててラシーヌの視線を追ってみたい。

「小さな学校」では、子供たちがフランス語の語尾変化や活用を一通り覚え、一般的な統辞法の規則を学んだ早い段階から、著述家の読解と作品解説の作業に向かうことを奨励していた。そして学習の進んだ生徒には、理解した内容を自分で分析し、気に入った美しい表現や注目すべき思想を書き留めたノートを作成することを求めた。各生徒はこうして、自分の目的に沿って本の抜粋や注意書きを収集することに勤しんだわけで、私たちの手元にもラシーヌが使用していた小さな「携帯図書館」が貴重な研究資料として残されている。その中に私たちが問いかける主題を、とりわけ引き立たせるイメージを持つ一文がある。ラシーヌの手で「1656年5月29日」と日付が記された、プルタルコス『倫理論集』1574年バーゼル版の余白に残した注釈である。

<sup>30</sup> J.Racine, *L'Abbrégé de l'histoire de Port-Royal*, et aussi, son testament de 1698.

<sup>31</sup> « Racine et l'humanisme de Port-Royal », in *Port-Royal et l'humanisme*, Chroniques de Port-Royal no56, Paris, 2006.

Comme ceux qui sortent de quelque grande obscurité ne peuvent tout d'un coup supporter l'éclat de la lumière du soleil, mais il faut qu'ils s'y accoutument peu à peu en regardant quelque lueur bâtarde et sombre : ainsi la splendeur des vérités chrétiennes nous éblouit, si nous ne passons auparavant par les petites lumières des païens<sup>32</sup>.

真っ暗な場所から出た人間たちは、いきなりの太陽光の眩さに耐えることができないので、何らかの仄暗い雑種の光を見つめながら少しずつこれに慣れていかねばならない。こうして、もし私たちが異教徒の小さな光をあらかじめ通過するのでなければ、キリスト教の真理の強烈な光は私たちの目を眩ませてしまうのだ。

ナイトが指摘するように、ギリシャ語のテキストにフランス語で直接コメントを入れているラシーヌは、ラテン語の仲介なしにギリシャ語を学ばせるランス口の教えに忠実に従っているようだ<sup>33</sup>。こうして彼はプルタルコスの「少年は如何に詩を聴くべきか」という教育論の一節を翻訳し、末尾に聖バシレイオスから引用したこの文章を継ぎ足している。この4世紀のギリシャ人神学者の言もまた、プルタルコスの同じ詩の教育論から想を得たものである<sup>34</sup>。

基になったプルタルコスの論では、「νόθω φωτι」というギリシャ語表現が用いられているが、このギリシャ語は、ラシーヌが時折参照したとみられるアミヨの翻訳でも「quelque clarté bâtarde」「雑種の（非嫡出の）なんらかの光」となっている。この論ではプルタルコスはまず哲学者としてプラトンに依拠し、

<sup>32</sup> J.Racine, *Œuvres*, éd. P. Mesnard, Paris, Hachette, coll. « Les Grands Écrivains de la France », (GEF) 1885-1888, t.VI, p.304-305. (以下ラシーヌによる注解ノートの引用は拙訳による。)

<sup>33</sup> R.C.Knight, *Racine et la Grèce*, Paris, [Boivin, 1950], nouv. éd. Nizet, 1974, p.163; C.Lancelot, *Nouvelle méthode pour apprendre facilement la langue grecque*, Paris, P. Le Petit, 1655, in-8, XXXIV.

<sup>34</sup> Saint Basile, *Aux jeunes gens sur la manière de tirer profit des lettres helléniques*, texte établi et traduit par L'abbé F.Boulenger, Paris, Les Belles Lettres, 1965, II, 45.

その神性の概念を踏襲しつつ詩人が神について誤った偽の考えを広めていることを糾弾しながらも、「詩人は真実を少しも考慮しないが、プラトンの言うように善と真とを見極める認識をあらかじめ備えるのであれば、詩の読書も有害ではない」と述べている。

ギリシャ語の原書講読を奨励しながら、ポール・ロワヤルの師たちは少年ラシーヌを16世紀のユマニストたちが経験した知的冒険へと誘い出していく。彼らは「腐敗した」異教の内部に、真の宗教の光と善のモラルへ人間の魂を向かわせる鉞脈を探し出そうとするのだ<sup>35</sup>。徳と学問と社会性の涵養を旨とする教育をユマニズムの遺産として受け継いだ師たちは、子供たちの霊的な、スピリチュアルな生に格別の配慮を行ない、「霊的な生こそキリスト教徒の生に適ったものであり、それは聖書から導き出される真理によってのみ維持される」ことを強調する。

こうして、ポール・ロワヤルの隠士たちは、聖書の真理に子供たちを向かわせるという意味で、「雑種の光」の教育効果を認めていた。しかし、彼らは同時に、この光が啓示や聖書そのものによって、とりわけ異教の名高い侮蔑者である聖アウグスティヌスによって罪の宣告を受けている、ということも決して忘れはしなかった。この非合法の光は、光であるために罪ありとされなければ表明されないこと、光が闇の罪の宣告であることを、忘れることはなかったのである。ここに異教の薄暗い光に対する彼らのジレンマ、曖昧さがあり、ここからギリシャ・ローマ文学の教育的効果に関して、隠士たちの間にも見解の不一致が生じてくる<sup>36</sup>。

ラシーヌがこの注釈作業を行っていた時期は、まさにポール・ロワヤルにとって迫害の嵐の時代だった。アルノーが1656年1月17日にソルボンヌから有罪宣告を受け、パスカルの『プロヴァンシアル』が出版開始され、3月、隠士たちと生徒たちは退去命令を受けて離散の憂き目に会う。ラシーヌはこの期

<sup>35</sup> Voir J.Boch, *Les Dieux désenchantés*, Paris, Champion, 2002, p.28-29.

<sup>36</sup> テレンティウスの喜劇の翻訳などを手掛けたサシは真理をめぐる聖書解釈のために異教詩人の作品を読解することを積極的に推奨したが、アルノーはこうしたキリスト教と異教のパラレリズムを一切認めなかった。

間を修道院とリュイーヌ公爵所有のヴォーミュリエ城とを行ったり来たりして過ごす、それでも、ランス口師の指導なしに独力でギリシャ語テキストの読解を続けていたようである。余白ノートにはこの時期にポール・ロワヤル周辺で波立っていた諸問題 — 恩寵問題、カーンでの聖母誓願事件<sup>37</sup>、ポール・ロワヤルにかけられた異端、陰謀の嫌疑の数々 — を暗示させる注記も数多く残されているが、こうした騒ぎに翻弄されながらも、師の教えを忘れずに黙々と神学的な真理を拾い集める作業に熱中していた痕跡もしっかりと刻まれている。「真理は多様な神話の中に隠されている」とラシーヌは書きつける。そして実際に、「真理がそこで神話に混ざり合うことで光の強さを和らげる」「雑種の光」の下で照らし出されてきた、いくつかの真理のかけらを神話の形で発見していくのである。

プルタルコス「自分を讃めることについて」という論考で、彼の思想の根幹である宗教的展望をもつ哲学について、以下のように語っている。

[...] Aristote dit à Alexandre qu'il était permis d'être fiers, non seulement à ceux qui exerçaient leur puissance sur beaucoup d'hommes, mais aussi à ceux qui avaient des opinions vraies sur les dieux<sup>38</sup>.

アリストテレスはアレクサンドロスに言う。多くの人間に権力を行使する人々だけでなく、神々に関して真の見解をもっている人々を信用するがよい、と。

この箇所にはラシーヌは必ず「神学」と書き込んで一単語で要約する。実際、この道徳哲学者は「哲学は神学という目的を持つ<sup>39</sup>」と言明し、一神教をここ

<sup>37</sup> イエズス会士によるジャンセニウスを中傷した暦アルマナ事件に先立つ 1653 年 6 月、カーンのイエズス会士はイエス・キリストが「十分な恩寵」の効果を信じる者のみに対して贖い主であってくれという誓願を聖母に立てた。

<sup>38</sup> Plutarque, *Comment se louer soi-même sans exciter l'envie*, texte établi et traduit par R.Claerr, *OM*, 1974, t.VII, 545A.

<sup>39</sup> *Id.*, *Sur la disparition des oracles*, texte établi et traduit par R.Flacelière, *OM*, 1974, t.VI, 410B.

から導き出していくが、この結論は多くの神父から、そしてモンテーニュからまでも賛同を得ることになる。この「神学」に基づいて、ラシーヌはプルタルコスが『イリアス』を注解している部分を取り上げ、幸運の女神に帰せられたアキレスの勝利について、

GRÂCE. Dieu auteur des belles actions<sup>40</sup>.

恩寵。善行を作り出す神。

と評釈している。一方でラシーヌは、プルタルコスが「少年は如何に詩を聴くべきか」という論考においてアイスキュロスの詩行を引きながら解説した一文：« Dieu chez les mortels suscite un acte coupable »（「罪深き行為を死すべきもののうちに惹起する神」）に対して次のような書き込みを行っている。

Dieux auteur des maux<sup>41</sup>.

悪行を作り出す神々。

少年ラシーヌの頭の中には、この二様の神の姿が明確な善／悪の対比の下に描き出されているのである。

プルタルコス自身も、ホメロスの神々、互いに対立し、戦い合い、人間に傷つけられ、気難しい性格を示すこれら異教の神々を、詩人の創作物にすぎないと非難しながら、

Car voilà le sort que les dieux ont filé pour les misérables mortels : vivre dans l'affliction, tandis qu'eux-mêmes sont exempts de soucis<sup>42</sup>.

神々が一切の苦悩から免れている一方で、悲嘆のうちに生きること、これ

<sup>40</sup> J.Racine, *OEuvres*, GEF, VI, p.319.

<sup>41</sup> *Ibid.*, p.304.

<sup>42</sup> Plutarque, *Comment lire les poètes*, 20F.

が惨めな死すべき者たちに対して神々が与える運命である。

と述べて、エウリピデスを引用しながら、「Si les dieux font du mal, ils ne sont pas des dieux<sup>43</sup>。」(「もし悪行をなす神々がいるとすれば、それは神々ではない」)と結論づけている。このようにプラトンの、ストア派哲学の解釈では、神々は真の神々であるためには本質的に無感動であり、そして無感動であるがゆえに善良である、ということになるが、このプルタルコス注解を受けてラシーヌは、「神々」を大文字単数の「神」に変えて、「Si Dieu fait quelque mal, il n'est pas Dieu」と即座に書き換えている。プラトン派たちは、「神はただすべての形体を超えて非形体的、すべての精神を超えて不朽であり、わたしたちの原理、光、善である」と考えた点においてキリスト教徒と意見を同じくしているのだ、と主張したのはアウグスティヌスであったことを思い出そう<sup>44</sup>。

この「唯一真実最善の神」によって私たちに与えられている「恩寵」。「恩寵」という指摘が、ラシーヌの手によって『倫理論集』のあちこちに書き留められていることに注目したい。例えば、人間の徳を意のままに増やしたり減じたりするゼウスの行動<sup>45</sup>や、フェニックスに父親殺しの汚名を着せないために彼の怒りを静めたある不死なる者のみわざ<sup>46</sup>、そして人類と神々の父が毎日人間の心に吹き込む様々な考え<sup>47</sup>などが拾い上げられ、そこに次々に「恩寵」という注記が書き込まれていく。さらには「七賢人の饗宴」の論でエナロスによって語られる、イルカに変身して人間を救う神の逸話を受けてプルタルコスは、人間の魂について、「tantôt agit de son propre mouvement, tantôt se met à la disposition de Dieu pour qu'il la redresse et la tourne comme il veut<sup>48</sup>」(「自

<sup>43</sup> *Ibid.*, 21A : *εἰ θεοὶ τι δρῶσι φᾶνλον, οὐκ εἰσὶν θεοὶ.*

<sup>44</sup> Voir Saint Augustin, *La Cité de Dieu* (par la suite abrégé en *De civ. Dei*), 4<sup>e</sup> éd. Dombart, Paris, Coll. Bibliothèque Augustinienne, 1959-60, VIII,10. アウグスティヌス『神の国』1-5、服部英次郎訳、岩波書店、1982-1991年。

<sup>45</sup> Plutarque, *Comment lire les poètes*, 24E.

<sup>46</sup> *Ibid.*, 26F.

<sup>47</sup> *Id.*, *Consolation à Apollonios*, texte établi et traduit par J.Defradas et R.Claerr, *OM*, 1985, t.II, 104E.

<sup>48</sup> *Id.*, *Le Banquet de sept sages*, texte établi et traduit par J.Defradas et R.Claerr, *OM*, 1985, t.II, 163E.



ら思うままに行動することもあれば、御心のままにこれを立て直し、向きを変えたりなさる神に自らを委ねることもある」と説明するが、ここにラシーヌは大きく「恩寵」と書き入れて短い注釈を加えている：« L'âme est conduite de Dieu partout où il veut<sup>49</sup> »（「魂は神の思召しのままにどこへでも導かれていく」）。迫害のさなか、ポール・ロワヤルの真摯なる学究の徒はその師とともに、イルカに翻弄されることの苦しみと喜びを分かち合っていたに違いない。

タツソスの大工でプルタルコスが「救いの思想によって養われる人間」と呼ぶ男のエピソードを、ラシーヌはジャンセニスト的な見地から観察する。どんなことがあっても悲嘆にくれず、自慢もせず、ただ淡々と毎日を生きるこの平凡な男をプルタルコスはこう形容する：« il vit parmi tant d'hommes avec mille fois plus de dignité et d'aisance que des milliers de gens, il va son chemin en célébrant son bon Génie et son genre de vie<sup>50</sup> »（「彼は何千もの人間のなかにあって千倍もの尊厳とゆとりをもって生きる。彼は善霊と生活様式に感謝しながら自らの道を行く」）。この部分を捉えてラシーヌは « INGRAT ENVERS DIEU. GRÂCE. PÉCHÉ ORIGINEL<sup>51</sup> »（「神に対する不孝。恩寵。原罪」）と立て続けに注釈を入れていく。この男の徳の高さを「何千もの人間」と対比しながら、救霊と予定の神秘、恩寵の中にとどまる選ばれた少数の人間とその羊小舎を出る多数の人間、というアウグスティヌスの命題をここに読み込むのである。ピタコスの「われわれの各々に悪がある」という言葉を「原罪」に読み換えながら、ラシーヌはサン＝シランがプロティノスから借りて説く恩寵のイメージそのままに、「御自身と一体化した神の最初の光明<sup>52</sup>」をプルタルコスの中で経験したのかもしれない。

私たちの耳元にはすでに、遙か遠くから、フェードルの最後の呻き声が聞こえてきてはいないだろうか？

<sup>49</sup> J.Racine, *OEuvres*, GEF, VI, p.318.

<sup>50</sup> Plutarque, *De la tranquillité de l'âme*, texte établi et traduit par J.Dumortier, *OM*, 1975, t.VII, 1<sup>ère</sup> partie, 470C-D.

<sup>51</sup> J.Racine, *OEuvres*, GEF, VI, p.320.

<sup>52</sup> Voir J.Orcibal, *Saint-Cyran et le jansénisme*, Paris, Seuil, 1961, p.91.

Et la Mort, à mes yeux déroband la clarté,  
Rend au jour qu'ils souillaient toute sa pureté. (*Phèdre*, V,7, v.1643-1644)

そして死は、私の眼から光を奪い去ると同時に、  
この眼ゆえに汚されていた日の光に、くまなく澄んだ清らかさを、  
取り戻させるでしょう<sup>53</sup>。

ポール・ロワヤルにおいてラシーヌが授かった「光輝」のイニシエーションは、『ブリタニキユス』や『フェードル』における自由への欲望を契機として、『エステル』の光溢れる恩寵の瞬間へと収斂していく。もし私たちが、「雑種の光」の下に、未来のフェードルの作者への、日の光の煌く回帰が予告されていることを確認するのだとしたら、異教古代に対するポール・ロワヤルの二重の態度を考慮しなければならないであろう。ポール・ロワヤルの師たちは、確かに、キリスト教的ユマニストであり、彼らにとって、異教の仄かな光はキリスト教の真理が神話の形で表現された、大いなる啓示の前兆であった。しかしこの光は同時に、まず何よりもアウグスティヌスの信奉者である彼らにとって、フェードルの穢れた「目」が幻視する迷宮の闇の底と、最後にその「目」から解放された曇りなき日の光の間、その中間地帯の胡散臭い仄暗さへの悪魔の忍び入りでもあった。彼らは誰よりもよく知っていたのである — 光は闇の罪の宣告であるということ、それは私たちの救いであるばかりでなく、私たちの罪の源泉でもある、ということ。

<sup>53</sup> ジャン・ラシーヌ、『フェードル』、渡辺守章訳、岩波文庫、1993年。



シャルル=アントワーヌ・コワペル作『アハシュエロス前のエステル』1711年以前、個人蔵

<https://www.meisterdrucke.jp/fine-art-prints/Charles-Antoine-Coyvel/85248/%E3%82%A2%E3%83%8F%E3%82%B7%E3%83%A5%E3%82%A8%E3%83%AD%E3%82%B9%E3%81%AE%E5%89%8D%E3%81%AE%E3%82%A8%E3%82%B9%E3%83%86%E3%83%AB.html> (最終閲覧日：2022年2月4日)

